

中野区立桃園第二小学校 同窓会通信

—第19号—



新たな歩みのスタートにあたり!!
同窓会会長 矢島寛典(三七期)

「同窓会通信第十九号」の発行に当たり、先ずは皆様からの平素の同窓会に対する暖かいご支援ならびに昨秋の記念式典や祝賀会を始めとする桃二小開校百周年記念諸事業へのご支援に心より感謝申し上げます。お陰様でコロナ禍の中、色々な制約を受けながらも無事にそして大成功で百周年を迎えられたことをご報告申し上げます。

さて、母校は桜満開の四月六日、六三名の可愛らしい新入生を迎え、総勢三百四十名の生徒で元気に開校百一年目となる新年度が始まりました。開校百周年という大きな佳節を終えて、新たな歩みをスタートするにあたり、改めて同窓会の現状



▲開校101年を迎えた母校



▲令和4年度入学式

認識と今後の課題、二点について考えてみたいと思います。

その一点目は「同窓会活動の要となる会員の減少」です。少子化の進捗による会員の減少は避けられず、本年の消息が判明している会員数は十年前を四百人下回る二千六百人です。又、高齢化により同窓会活動に励んでいただける方々が減少しております。この傾向はこのままでは必至の事なので、従来の方法に加えて同窓会ホームページの活用など種々の方法で未登録同窓生の発掘に鋭意努力したいと思います。

そしてその二は「同窓会活動を支える人材の不足」です。やつと適材が見つかったとしても現役で就業中であつたりして苦勞しております。このことに関しても粘り強く草の根運動で母校愛溢れる人材の発掘に努めてまいりたいと思います。

又、同窓会活動にあつてはこの度の百周年記念誌の中で元同窓会会長の太正氏が仰つて下さつている「同窓会というものは、むしろ小さい会ではなくて、自分の人生にちよつとしたプラスの気分にさせていたただけて、幼い頃を思い出させてくれるほのぼのとした会になつていただきたいと念願しております。」という言葉をもっとに励んでまいりたいと存じます。

(文中の記念式典と祝賀会の詳細は挿入資料・ももに特別号を参照ください)

開校百周年記念諸行事を終えて
同窓会副会長 石原宏祐(三七期)



桃園第二小学校開校百周年記念式典・祝賀会は、コロナ禍ではございましたが終了いたしましたことをご報告申し上げます。同窓会の皆様からお寄せいただいた「祝う会」への協賛金は、中野駅北口横断幕製作・展示、サンモール空中ギャラリ製作、ブロードウェイ階段ギャラリ展示等、広報活動費として使用したほか、案内状印刷、通信費、会場装飾と幅広く活用されました。また在校生へのTシャツ、エイサーの太鼓の寄贈にもあてられました。同窓会の協賛金の一部を使って、小学校へ金管楽器(チューバ)も寄贈いたしました。

今回の式典・祝う会開催にあつた

同窓会「総会」開催のお知らせ

第九回「定例総会」を左記のとおり開催いたします。多くの方々のご参加をお待ち申し上げます。

記

日時 令和四年七月十七日(日)

午前十時三十分開会・十二時閉会予定

会場 桃園第二小学校体育館棟一階 会議室

議題 会計報告・新役員紹介・百周年記念式典と祝賀会報告(DVD)



▲寄贈品・チューバのお披露目

では、受付から接待にいたるまで在校生保護者(PTA)の皆様にお力添えをいただき、心温まる祝賀会となりました。

改めまして、協賛金を拠出いただいた同窓生の皆様に深く感謝申し上げます。今後とも引き続きのご支援を賜りますようお願い申し上げます。

QRコードは、周年HPへのリンクです。(スマホのカメラを向けてみてください。HPにとびます)





集団疎開の思い出

大西晴夫(二四期)

集団疎開とは第二次大戦中昭和一九年から二十年にかけて小学校(当時は国民学校)上級生の安全を計るため東京都都会地から地方へ学校単位で親元を離れ先生に引率され移住したことを云います。桃二の場合は福島県へいくつかのグループに分かれてまいりました。

私の場合は一、夏井村^{ナツイカセ}専稱寺^{センショウジ}(現いわき市)さらに安全な場所という事で二、神谷村^{カミヤムラ}弘源寺^{コウゲンジ}(現いわき市)最後に三、翁島村^{ウツシマ}押立温泉の旅館二軒さぎの湯と湊屋(磐梯山のふもと猪苗代湖の北西)にまいりました。地元(学校の受入余地がなかったため)と思われませんが地元小学校での授業・交流の記憶はありません。

一、専稱寺時代(春より秋)

夏井川添いの農村地域で買い物に行くところもなく寺からほとんど出なかつたと思います。地元(の農家に分散して半日ホームステイ)ただけで子供同士の交流はありませんでした。この時代の記憶に残っていることは、ニュース映画

用に食事時の様子を撮影されたことがありましたが勿論見る機会はありませんでした。フィルムが残っておれば見たいものです。又慰問で江戸屋猫八師匠が来られたことがありました。稲作地帯でしたので都会育ちには蝗^{イナゴ}が珍らしく、後年酒のあてとし居酒屋で佃煮として再会しびつくりした次第です。

二、弘源寺時代(冬)

雪がつもつたことが印象に残っています。この頃は親からの送金が到着しており胡桃の実を平駅の近くに出て買い、焼いて実を食べるのが唯一の楽しみでした。平駅で蒸気機関車の入れ換をあきずに見たものです。



▲平成26年撮影の弘源寺

三、押立温泉時代(春から秋)

二軒の旅館に分かれて生活しま

した。磐梯山のふもとで稲は近くになく山菜と野菜位、近くに雑木林があり胡桃、栗の木、あけびの実など始めて現物が見られたものがありました。そばの花もその一つでした。

磐梯山頂まで全員で登り五色沼が天気良く見晴らせたのが印象に残っております。又猪苗代湖には遠足で行きましたが野口英世の生家が見られました。まだお姉様が存命でありました。

疎開先では幸い空襲にあつたことはなく食料事情を除いては安全であつたと思います。神戸市在住祖父からの昭和二十年六月二十日付のハガキが手元に残っており郵便など意外にインフラはしつかりしていたのではないのでしょうか。食料は終りの方は特に米が少なくなりました。もう少し終戦がおくれれば栄養失調が大きくなつたかと推測します。地元とのつながりがなく引率の先生方は苦勞されたことでしょう。大病を患つた生徒の記憶はなく、しらみに悩まされましたが無事帰京することが出来ました。今から振りかえると良い経験であつたと思います。以上

【追記】

筆者は驚の湯のみですので湊屋の名前が正しいか、又、両方の引率の先生のお名前について情報を

お寄せ下さるよう宜しくお願い致します。又、会津の方も後に分かれて住むようになったという話もありますのでこちらも関係方々からの情報を同窓会事務局迄、お寄せ下さるようお願い致します。



集団学童疎開の追想記

矢島園子(二四期・旧姓・鈴木)

学童疎開の記憶よりこの写真は私が以前から目にしていたのでが入院中に住まいの部屋が動いて見失つた一枚です。



▲四ツ倉駅で

学童疎開奥会津宿の横から鉱石を積んで四ツ倉の駅まで運んでいったものです。又、生徒たちはこの線路沿いに歩いて行けば四ツ倉の駅より改札を抜けてそこから上野にまっすぐ帰れます。友達の中には東京の家に帰りたい一心で「夜逃げ同様」で必死の思いで逃げて

：乗って行きました。海の近くまで行き、でも改札口で駅員さんに連れ戻されてしまいました。夜逃げした友達連れ戻され電車に乗れたので喜んでいました。

【追記】

この寄稿文は二〇一八年発行の同窓会通信第一五号に掲載された寄稿文の追加として今回、掲載させていただきます。



桃二小の思い出

内藤能房(三三期)

私が桃二小に入学したのは、四月に一ドル三百六十円の為替レートが設定され、七月に下山事件、三鷹事件、八月は松川事件という国鉄がらみの謀略事件が引き続き起こり、九月にはキティ台風、十月には中華人民共和国の成立、十一月に湯川秀樹博士の日本人初のノーベル賞受賞などがあつたまだ連合国占領下の昭和二十四(一九四九)年四月であつた。

入学時の不安な気持ちは今でも忘れられない。入学式は母が病後で出られず、近所の同級生のお母さんが付き添ってくれた。そのな

んとも言えない不安のせい、小心ものの私は名前の書かれたハンカチ留め金の色と担任の先生の名前を妙に鮮烈に覚えている。一組は白、筆宝先生、二組は赤、翁長先生、三組は緑、大原先生、四組は桃色、藤原先生、五組は黄色、萩原先生、六組は青、熊谷先生。私は六組で紺色だった。熊谷先生はその後産休に入られ、三科先生に替わった。

二年時にクラスが増え七組が出来たが、三年になる時、昭和小学校の新設に伴う一部生徒の転出により、五組編成（我が一組竹ノ内、二組酒井、三組安田、四組並木、五組小田切、敬称略）となった。この年は「創立三十周年記念」式典があった。昨午が「百周年」であったので、あれから七十年ということになる。我々が歳をとるはずである。

四年生の時、担任の竹ノ内一郎先生が図書室の主任だった関係で、初めて最後のラジオ（短波放送）出演を経験できた。六年生まで替わらなかつた竹ノ内先生には、四、五年時の劇の出演（中野文化会館）や五、六年時の運動会での放送係担当、さらには中野区全体の児童委員会総会への代表出席や卒業時の「区長賞」受賞等々、他の人から見れば「ひいき」とも言える格別の処遇にあずかった。昨午秋はからずも叙勲の

栄に浴したが、これもすべて桃二時代に竹ノ内先生が与えてくださった「自信」というか「過信」の賜ではなかつたかと、先生には感謝しても仕切れない思いである。



▲不安な入学式-鈴木校長・熊谷先生と共に

不味かつた給食と卒業時の国立中学受験失敗を除けば、四年時担任の佐々木先生、劇担当の並木先生、さらには音楽の島先生、図工の堀越先生、家庭科の芳賀先生にも可愛がられ、桃二、とりわけ三年以降の学校生活は私にとり大へん居心地の良いものであった。これは私ばかりではないと思う。我が六年一組の同窓生の本『同窓会通信』への寄稿の多さ（二〇〇五年の四宮君から、中川君、新居君、旧姓山中さん、福迫

君、そして昨年二〇二一年の旧姓石原さんまで）は群を抜いている。竹ノ内先生の下につどった我々各々の桃二時代の良き思い出を物語っているのではないだろうか。

最後に、『卒業アルバム』を見て、今どきには考えられない育ちのよい、上品な女子（二組の土肥さん、五組の伊賀さんや奥山さんなど）が同じ学年にいたことの幸運を、他の女性軍からの響感をかうこと覚悟で、桃二の思い出の最後として記して結びとしたい。



忘れなかつた忘れ物の話

浅川りお(五二期)

この寄稿文の話をもらった時、自分が桃二時代の事をほとんど覚えていない事に気がついた。なぜなら私は類をみない忘れっぽい人間なのだ。製造時、親がケチって最小限のメモリー機能を搭載したと思っっている。

そんな私にも鮮明に覚えている事が一つある。それは忘れもしない藤田先生。ある日、教室の後ろに「忘れ物ランキング」なるカラ

フルかつ巨大なグラフが貼り出された。そこで私は瞬く間に追隨を許さないズツパ抜きの一役に躍り出た。私の長い学生生活において、ここまで押しも押されぬ頂点に輝いたのは後にも先にもこの時だけだ。小二の私のプライドは傷ついた。そして反省もした。



▲当時の給食時間模様

が、しかし直後の給食費をまたもや忘れてしまったのだ。流石に自分でも呆れ返り、うんざりした。そして追い詰められた私は教壇に歩み寄り、先生に「家が貧乏で給食費が払えない」と言い放った。自分ではうまくその場を切り抜けたつもりだったが、驚いたのは

先生だ。我が家は当時、小さいながらも商店街でバイトを使って花屋を営んでいた。そんな家で小学生の数千円の給食費が払えない事があるのだろうか？優しい藤田先生は心配してくださり、すぐに電撃家庭訪問を実施し、事の顛末を親に話した。

母は怒った。忘れ物をしたからでなく、弁解の内容が恥ずかしすぎると。自分達がメモリーをケチつておいて、少しはフォローしてくれるが良いじゃないか、と後までずいぶん恨んだが、当時の我が家は育児放棄ギリギリの放任主義（今では感謝しているが）で、子供の忘れ物のフォローなど辞書になかつたのだ。

世間的に物忘れが許される年に近づいた今でも忘れ物は同じように多い。それでも未だ飢餓に苦しんだり、クサイ飯を食う事もなく、なんとか暮らしているのは、遅く育ててくれた親と周りの多くの寛容な人達のおかげだ。あの時、教室のみんなの前で何も言わず、私の最後のメンツを保つてくれた藤田先生にもこの場を借りて感謝の意を表したい。





僕の中の大切な時間の始まり

長吉秀夫(五二期)

小学校5年生から6年生の2年間は、僕の人生にとって大切な時間だった。この時期は、子供から大人になっていくための小さな種が芽生えはじめるときだ。仲間意識が強まり、異性への感情に戸惑い、強い好奇心が衝動的な行動を引き起こす。僕らのクラスには、そんなエネルギーを持って余している子供たちが多くいた。ようするに悪ガキだ。この悪ガキどもを2年間担任してくれたのが伊藤先生だ。伊藤先生は、戦争中は戦闘機に乗っていたと話していた。戦争が終わると、数年間、山の中で子熊と暮らしていたという。大きな声で怒り笑う豪快な先生に、子供たちは早々に「カバ」というあだ名をつけた。

5年生になって間もないころ、ある友達がかばにいたずらを仕掛けた。教室の入り口を開けると挟んでいた黒板消しが落ちてくる単純ないたずらだ。

「カバが来た！」
誰かの一言でおしゃべりに夢中だった子供たちは一斉に入り口に

注目する。しかしカバは、この簡単ないたずらには引つ掛からなひっかからないぞ」

「お前たちのいたずらには絶対に出席簿を教壇の上に置き、カバは豪快に笑いながらそう言った。これ以降2年間、僕たちは先生の周囲で様々ないたずらを仕掛け続けた。ドアを開けるとクラッカーが破裂する仕掛けや吊るしたバットが飛んでくるものなど、奇想天外ないたずらがたくさん生まれたが、そのたびにことごとく失敗する。そして、いたずらから身をか

わした先生は高笑いをする。すると子供たちはクラス全員で悔しがり、次の作戦を話し合う。いたずらを仕掛ける行為は、クラス内のルール作りや行動にも影響を与えた。毎日、好きな席に自由に座ることになったり、印刷室を使ってガリ版の新聞を作ったり、大きな水槽を教室に持ち込み、いろんな種類の魚を育てた。家の漫画を持ち寄って漫画図書コーナーを作り、

大きな壊れたラジオを直して休み時間にみんなで聴いていた。夏休みに学校に泊まって、夜の屋上で星を眺めたこともあった。他のクラスでは認められないようなことも、全員で話し合うことで実現していった。このように伊藤先生の指導によって、子供たちのいたずらへの好奇心は、いつの間にか社

会の仕組みを学習していく力へと変わっていった。子供だった僕たちは、カバという大人との信頼関係の中で、人生に大切な力を育んでいったのだ。今回この原稿を書くにあたり、人生を振り返って改めてそう強く感じた。

僕は、カバによって人間の個性や友達の大切さを教えられた。そしてその教えは、今でも僕の生き方の基礎になっている。60歳になつた僕の中には、今でも小学生だった僕が生き続けているのだ。

桃二100年、101年・・・



岡村百子(五六期)

昨年の11月、桃二百周年祝賀会で訪れた体育館は、きれいなお花や在校生の絵や祈念ボードで飾られ、委員の方々がこの祝賀会に準備に費やした時間はどれだけのものかどんなに大変であったか想像するに難くない、盛りだくさんのプログラムはバラエティに富んで飽きることなく、桃二の百年という大きな節目にふさわしい素晴らしい祝賀会でした。わたしが通っていた頃と変わらないはずなのに懐かしい体育館、そう、ここはわたしにとつてとても思い出深い

場所、舞台なのです。

1年生の時はスカートをはいていたのですが、いつの頃からか私は男の子になりたい、髪はショート、毎日ズボンをはいて自分のこととは「ボク」と呼ぶ小学生になっていました。そんなわたしが5年生の時の学芸会の演目は「走れメロス」、通常は先生が配役を決めるのですが、目立ちたがり屋の私はメロス役に立候補、当時は男の役は男の子、女の役は女の子の演じるのが当然だったので、先生方もかなり困惑されたかと思えます。確か「走れメロス」は桃二では初演、台本から演出を考える中、配役にまで難題を抱え込むこととなってしまった先生方、しかしそこはひとりひとりの個性を尊重してくださる恵まれた環境の中、全配役オーディションを行うこととなり、わたしは数名の男の子に交じってオーディションを受け、見事メロスの座を射止めました。



▲「走れメロス」を熱演!!

相手役のセリヤンティウスも女の子、自分からやりたいと言った役を見事みな演じ、劇はクライマックスへ。ラスト、メロスが現れるシーンは体育館後方から客席の真ん中を突っ切って舞台へ走ってい

くという大胆な演出、観客の驚いた歓声は今でもよく覚えていますが。劇は大成功、終わってからもしばらくは下級生の女の子達に「メロスだ」と声をかけられ、今でも同級生と会うと(たまに集まったり、9月の例大祭では天神で何年も集合写真を撮るのが恒例)「メロス」の話題が出るのがしばしばあります。それから時は経ち、姪の学芸会に足を運んだ際に偶然「走れメロス」が演目であり、期待を持って観ていたところ、ラストは同じ、「待ってくれ」と叫びながら客席後方から舞台へまっしぐらに走るメロスの姿が。あの時の演出が何年間も受け継がれているのかと感激したものでした。

中学受験に際しては校長先生が面接官となつてご指導下さり、その時の質問がそのまま出てきたことから面接は完璧、商売の子はちよつと難しいのでは、と言われた学校に無事合格。卒業と共にズボンからセーラー服姿になったのでした。

父や弟妹親戚10人が育ててもらった桃二の学び舎に今年の4月に新入生としてこども達が通うことになりました。101年目からの桃二でたくさんの方々に囲まれ、きつとたくさんの方々のことを学び元気にたくましく育つてくれるでしょう。同じ思い出を共有出来ることになることがとても楽しみです。